



みどりの風

平成30年9月3日発行
校報 第555号
〔みどりの風 第98号〕
練馬区立関町北小学校

ひび割れ壺

校長 大野 泰弘

2学期が始まりました。学校には子どもたちの明るい笑顔が戻ってまいりましたが、今年の夏は、全国各地で35度を超える猛暑と台風などによる集中豪雨により、大きな自然災害が頻発しました。皆様には、今年の暑い夏をどのように過ごされましたでしょうか。被災された皆様には、心よりお見舞いを申し上げますとともに、子どもたちや保護者の皆様の中にも、被害の出た地域にご親族やお知り合いの方が生活されている方もいらっしゃるのではないかと存じます。これから本格的な台風シーズンに入りますが、今年は発生ペースが例年より早いとのことですので、自然災害に対する備えを怠らないようにしたいものです。

さて、本校では、夏休みに入る前に学校保健委員会が開催され、そこで、NPO法人：ハートフルコミュニケーションの福田積子先生のお話を伺うことができました。ハートフルコミュニケーションでは、子どもたちが「生きる力」を確実に身に付けるために教たい3つの価値として、「愛すること」、「責任」、「人の役に立つ喜び」を掲げていらっしゃいます。「愛すること」で「自己肯定感」を根付かせる、「責任」をもたせることで、子どもの問題解決能力を育てる、「人の役に立つ喜び」を味わわせることで、自分の力を他者のために発揮して、良好な人間関係づくりにつなげていく、そのようなことを目標として、子どもたちが幸せな人生を歩めるように活動されているとのことでした。

福田先生は、この3つの価値について、ご自身の子育て中での出来事も例に挙げながら、分かりやすくお話くださいました。そのお話の中で、特に私の印象に残ったのは、最後に示してくださった、インドに伝わる「ひび割れ壺」というお話でした。そのお話の概要は、次のようなものです。

インドに水汲みを仕事とする人がいて、その人は二つの壺を持っていた。天秤棒の端にそれを下げて、水を運ぶ。その一つの壺にはひびが入っているが、もう一つは完璧にできている壺であった。完璧な壺は、小川からご主人様の家まで一滴の水もこぼさないが、ひび割れ壺は水がいっぱい入っても、家に着くころには水が半分減ってしまっていた。完璧な壺は、自分が作られた目的を達成していることに誇りをもっていたが、ひび割れ壺はいつも自分を恥じていた。そんなひび割れ壺が、ある日、水汲み人に話しかけた。「私は、自分が恥ずかしい。あなたにもすまないと思っている。あなたがどんなに努力しても、私はその努力に報いることができない。それがつらいのだ。」と。この言葉に対して、水汲み人は「これからご主人様の家に帰る途中、道端に咲いているきれいな花を見てごらん。」と応じた。ひび割れ壺は、天秤棒にぶら下げられながら、お日様に照らされて、美しく咲き誇る道端の花に気付いた。花はとても美しかったが、家に着くころには、また水が半分減ってしまい、ひび割れ壺は水汲み人に謝った。すると、その水汲み人は、「道端の花が、君の側にしか咲いていないのに気が付いたかい。僕は、君から落ちる水に気付いて、君が通る側に花の種を撒いたんだ。そして、君は毎日、僕が小川から帰る途中、水をまき続けてくれた。この2年間、僕は、ご主人様の食卓にきれいな花を欠かしたことがない。君があるがままの君でなかったら、この美しい花で家を飾ることはできなかったのだよ。」と語った。(NPO法人：ハートフルコミュニケーション代表 菅原裕子氏 訳 より)

私たちは、完璧な人間ではありません。どこかに「ひび」が入っている「ひび割れ壺」なのです。しかし、その「ひび」はその人自身の個性であり、それをどのように生かすことができるかを考えることが大事であると思います。完璧を求めることは大切ですが、自らを完璧であると捉えるのは傲慢な考えではないかと思えます。このお話の水汲み人はひび割れ壺の「ひび」を責めることなく、人の喜びのために生かす方法を考え、ひび割れ壺が人知れず活躍できる場、認められる場をそっと提供しました。

教育に携わる教師たち、子育てに勤しむ親たちは、この水汲み人のように、子どもの「ひび」を論うのではなく、それが人の役に立つ、人の喜びにつながる道は何かを考え、大輪の花を咲かせられるように導くことが求められるのではないかと思います。それには、子どもから何かを学ぶ姿勢が欠かせません。

学校では、2学期もいろいろな活動が予定されていますが、この水汲み人のような心で、子どもたちをお預かりしたいと考えています。今学期も、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。